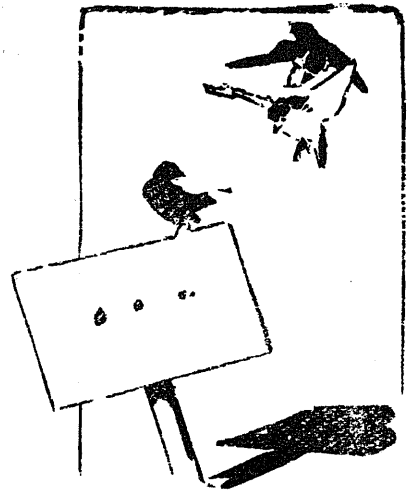

日露戰爭と動物

林　天然

昔神武天皇が、九州の高千穗の宮から、御出になりまして、長髓彥を御征伐なすつた時、何處からだか、一羽の金色をしてる鵄が飛んで來て、天皇が御持になつてゐる、弓の上に止まり、ピカピカと耀きました。それから賊軍は忽ちに打破られてしまつたのです。戰の最中に金色の鵄が飛び來て止つたのは、誠に目出度い祥瑞であります。金鵄勳章は、即ち此目出度い祥瑞から出來ましたので、明治二十三年の紀元節に、始めて定められたのであります。

で今から十年許り前のこと、明治二十七年九月十七日、日本艦隊が大孤山沖で、支那の北洋艦隊を攻擊してゐた時、一羽の靈鷹が飛んで來て、高千穗艦の檣に止つて居るから、直ぐ水兵に捕えさせ、そーして天皇陛下に献上したといふことは、誰でも御承知でありう。いつも日本が戰をすると、奇体に祥瑞があるのです。

今度露西亞と開戰すると、露西亞の旗標にある鷲が、そちからも、こちからも捕獲られたといふことが、屢々新聞紙上に載せられました。特に二

月十四日日本の水雷艇白鷹號が、朝鮮の某灣に碇泊してゐたとき、大きな鷲が岩角に止つて居つたから、水兵が直に翼を射つて之を捕え、宮内省に献上しました。

猶目出度いのは、日清戰爭の際、靈鷹の飛び下つた高千穗艦が、他の軍艦と共に列をつくつて、某海を航行すると、大きな鯨が、フワリと浮び出たので、高千穗艦は、イキナリ鯨の中腹を衝き破つて進行したといふことです。

それから旅順口攻擊の時でしたろー、日本から多くの鳩が、旅順口の方へ飛び行き、戰が終つてから、再びバラ〳〵と群をなして、飛び還つたといふことが、當時の新聞紙にみえました。

欠に四月三日、淺間艦が山東岬の沖を航行してゐた時、一羽の鷹が來て、甲板の上で硝兵をして居つた、上等兵曹八頭司德一郎氏の肩に止つたので、直ぐと之をつかまえ、暫く軍艦内で飼馴らし、それから海軍省に納めたのです。此八頭司上等兵曹は、日清戰爭の時も、高千穗艦の檣に止つた、靈鷹を捕えた人だそうです、何んと妙じやありませんか。

四月十三日日本艦隊が旅順口を攻擊して、マカロフ提督を殪しました時、出雲艦へ二羽の鷹が來て止つたので、水兵安保助藏氏が之を捕え、戰が終へて歸ろうとした所が、また〳〵一羽の鷹が來て止つたので、再び之を捕え、通合三羽になつたのです。これは大本營に納めるといふことでした。

此他新高艦が、某海を航行してゐると、一羽の角鴞が飛來て、檣に止つたから、同艦の副長淺野正恭氏が、小銃で翼を擊ち、巧く檣えたが、二三

日經つてから死んでしまいました。所がまた一羽の烏が、同艦へ來て止つたから、また翼を射つて之を捕え、毎日牛肉を喰はせて飼つてあるそうです。

今後まだ〳〵戰爭が續くから、色々な動物が、日本軍の方に來るでしょう。或は黑鳩將軍が捕えられるかも知れません、そーしたら頗る愉快ですな。序にいひますが、日露戰爭があつてから、出征軍人の留守見舞の進物に、張子の虎が大部流行るそうです。これは「虎は千里の籔を越えて、再び千里の路を歸る」とか、或は「虎は死して皮をとどめ、人は死して名を殘す」とかいふ意義でありましよう。

（おはり）

二十四

不思議な物語

太田龍東譯

一寸一言

世の中に、面白いお話も隨分澤山ないではありませんが、この物語ほど面白くて不思議なお話は少ないだらうと思ひます。不錯すると皆さんは、斯樣に思はれるでありませう、彼麼龍東が、なにそんな面白い緯を考へ出すものかと。いかにも、御尤も千万なことで、龍東のやうなものがいくら考へたとて、怎碌なことを思ひつかう筈はムいません。

那麼にしても、なにか面白い緯の書いてある本でもあつたなら、せめて眞似なりと爲して見ようと思ひまして、いろ〳〵探した所が一つあつたのです。それは、西洋の本で、中には不思議なこと